

「み」について①

前号までは、「うを」はサンショウウオのことであり、教祖は、「サンショウウオ」を通して男雛型の「理」話を私たちに説かれていたのではないかと、ということを紹介した。

そこで今号からは、「み」とは何かについて、さまざまな視点から紹介する。

“こふき”資料の分析と方法

「うを」のときと同じように、「み」についても、以下に示す18篇の“こふき”資料をもとに分析した。

18篇の資料は、①山田本（15年本）、②榊井本A、③榊井本B、④上田本、⑤梅谷本、⑥杉田本、⑦不詳本A、⑧不詳本B、⑨今村本、⑩喜多本、⑪江本本、⑫宇野本（以上16年本）、⑬前川本、⑭旧今村本、⑮増井本、⑯井筒本（以上17年本）、⑰松尾本（18年本）、⑱鴻田本（20年本）である。

分析は、上記18篇に記載されている「み」に関する説明表現を抜き出し、それらを類型化しながら動物学的に該当する動物を特定する方法を用いた。そのさい、上記の②榊井本Aに記載されている「み」としてのいわゆる“みい”の表現を類別し、表現内容から当該動物を具体的に推定した。とくに、当時の一般庶民が“みい”をどのように認識していたかについては、『和漢三才図会』などを参考に判断した。

“みい”の分類

18篇の資料中に、“みい”に類する表記名は「み」「みい」「美」「巳」の4種類あり、合計28例を確認した（表1）。

表1.“こふき”資料別にみた“みい”に相当する異表記名と数。

資料	表題	み	みい	美	巳	合計
①山田 (15年本)	「古記」	1				1
②榊井 A (16年本)	「神代の古記」		2			2
③榊井 B (16年本)	「神の古記」			1		1
④上田 (16年本)	「神の古記」			2		2
⑤梅谷 (16年本)	「神の古記」		1			1
⑥杉田 (16年本)	「神の古記」			2		2
⑦不詳 A (16年本)	「神の古記」			1		1
⑧不詳 B (16年本)	「神の古記」			2		2
⑨今村 (16年本)	「神の古記」				2	2
⑩喜多 (16年本)	「神の古記」			1		1
⑪江本 (16年本)	「神乃実古記認文」		2			2
⑫宇野 (16年本)	「おはなし」		1			1
⑬前川 (17年本)	「神の古記」		2			2
⑭旧今村 (17年本)	「神の古記」		2			2
⑮増井 (17年本)	「神の古記」					0
⑯井筒 (17年本)	「神代古記写」			2		2
⑰松尾 (18年本)	「神の古記」	1	1			2
⑱鴻田 (20年本)	「神の伝里記」			2		2

表1に示したように、28例すべてが「み」で始まる表現であることから、当該動物名は「み」で始まる動物だと類推することができる。

また、2文字と1文字で分けると、2文字の「みい」は13例（約46%）で、1文字の「み」あるいは「美」、「巳」の表現は15例（約54%）で、ほぼ同数だった。

図1に示したように、「み」の表現は2例（7%）で、その2例は①山田本と⑰松尾本だった（表1）。ただ、⑰松尾本では他に「みい」の表現もあった。また、⑨今村本の巳を含む3篇を除くと、「みい」と「美」の二つの表現に集約され（86%）、

しかもそのほとんどは16、17年本だった。これらの表現が16、17年本の特徴であるとしても、「みい」が「み」や「美」の表現の変形であるとするならば、「みい」は「み」あるいは「巳」と同義であり、「蛇」の意味だと解釈することができる。

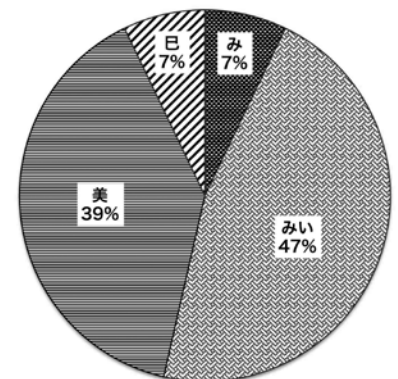


図1. “みい”に相当する異表記名の割合。

“しろぐつな”の分類

一方、“みい”は“しろぐつな”であることから、“しろぐつな”に該当する表現を18篇の中から抽出すると、12種類、合計47例を確認することができた（表2）。

表2.“こふき”資料別にみた“しろぐつな”に相当する異表記名と数。

資料	表題	白くつな	しろぐつな	しろくつな	白くつな	白くちな	しろぐちな	はくじや	しらぐつな	白グツナ	しろぐちな	白クツナ	合計
①山田 (15年本)	「古記」	1											1
②榊井 A (16年本)	「神代の古記」	1	1	1									3
③榊井 B (16年本)	「神の古記」			1	1	1							3
④上田 (16年本)	「神の古記」			2	1								3
⑤梅谷 (16年本)	「神の古記」			2	1								3
⑥杉田 (16年本)	「神の古記」			2	1								3
⑦不詳 A (16年本)	「神の古記」			2	1								3
⑧不詳 B (16年本)	「神の古記」			2	1								3
⑨今村 (16年本)	「神の古記」					3							3
⑩喜多 (16年本)	「神の古記」			2	1								3
⑪江本 (16年本)	「神乃実古記認文」	2			1								3
⑫宇野 (16年本)	「おはなし」						1						1
⑬前川 (17年本)	「神の古記」		2					1					3
⑭旧今村 (17年本)	「神の古記」		1					1	1				3
⑮増井 (17年本)	「神の古記」				1					1			2
⑯井筒 (17年本)	「神代古記写」										1		2
⑰松尾 (18年本)	「神の古記」		1	1		1						1	2
⑱鴻田 (20年本)	「神の伝里記」	1						1					3
												1	2

しかし、その中の1篇、⑨今村本の「白蛇」の表現3例の中には、「しろぐつな」と「しろくつな」のルビがふられた「白蛇」という字が2例あった。

「しら」あるいは「しろ」で始まる表現は10種類34例（約72%）で、「はく」で始まるのは2種類13例（約28%）だった。また、「しろ」で始まる「しろぐつな」「しろくつな」「しろぐちな」「しろくちな」の表現は、それぞれ20例、9例、4例、0例の計33例あり、全体の約70%を占めた。おそらくこの四つの表現はほとんど同じ意味を表していることから、“しろぐつな”は「しろぐつな」すなわち「白くつな」であると考えられる。

では、「白くつな」とは何か。⑨今村本の中に「白蛇（はくじや）也白蛇（しろくつな）共言」とあるように、「白くつな」は「白蛇」を意味する。実際に“こふき”資料の中では、特に16年本では、「白くつな、また白蛇とも言う」というような表現が多く見られる。

はたして、“みい”“しろぐつな”は本当に「白蛇」なのか、次回ではさらに議論を深めたい。